

第四章 長門(大嶺)炭鑛

長門無煙炭
鑛株式會社
創立
(明)三十年
長門煉炭試
製
(明)三十
三年

明治三十年十一月長門無煙炭鑛株式會社創立長門國美禰豐浦二郡ニ跨リ廣大ナル鑛區ヲ占メ無煙炭ノ採掘ヲ企テシガ恰モ海軍ハ煉炭原料タルベキ無煙炭ヲ物色中ニシテ明治三十二年乃至三十三年ニ於テ右長門炭ヲ原料トセル試製煉炭ノ分析ヲ試ミ次デ三十三年八月武田海軍機關中監等立合ノ下ニ天草炭業株式會社工場ニ於テ試製ヲナシ相當ノ成績ヲ示スニ及ビ長門無煙炭鑛株式會社取締役淺野總一郎ハ長門煉炭ヲ海軍艦艇ニ於テ試驗相成度旨ヲ海軍大臣ニ出願スルニ至レリ之ニ於テ海軍當局ハ同社ヲ指導シ右試驗煉炭(長門炭單獨及長門炭ヲ主原料トシ高嶋炭ヲ配合セルモノ)約百噸ヲ天草炭業株式會社ニ委託製造セシムルト共ニ一方天草旭炭肥前廳島無煙炭及長門桃ノ木坑炭竝ニ同櫛ケ谷坑炭等當時ノ重要ト認メラレタル諸無煙炭ニ就キ炭質鑛情等慎重比較研究ニ努ムル處アリタリ當時ニ於ケル長門無煙炭鑛株式會社ノ狀況概ネ次ノ如シ

(會社提出ノ調書ニ依ル)

會社創立

明治三十年十一月二十九日

資本金

五拾萬圓(拂込二十五萬三千九百三十六圓)

鑛區總坪數

凡一千五百萬坪

炭層ノ厚サ及數

十尺層 一枚 八尺層 一枚

其他厚四尺以上五尺迄ノ層三枚 都合五層

將來採掘可能推算量

凡二千萬噸

出 炭

當時ハ只試掘中ノ出炭ノミ

取締役會長

澁澤榮一

技術長 吉原政道

翌三十四年六月右試製煉炭ハ石炭調査委員ヲシテ試驗セシメラレタル結果有望ト認メラルルニ依リ引續キ艦艇ニ於ケル大量實地試驗ヲ遂グルコトトナリ更ニ金田炭一割二分乃至一割七分ヲ配合炭トスル長門試驗煉炭ヲ日本煉炭會社土井首工場ニ委託製造セシメ石炭調査委員ハ陸上試驗ニ於テ他ノ各種炭ト詳細比較試驗シ且ツ軍艦高雄及驅逐艦ニ於テ次デ翌三十五年一月水管罐ヲ裝備セル軍艦艦手ニ於テ實地試驗ヲ行ヒシガ同年二月重久石炭調査委員長ハ左記要旨ノ終末報告ヲ提出セリ

試 驗 成 績

一、蒸發力ハ略精選和炭ニ等シクシテ英炭及天草煉炭ニ及バズ

長門煉炭ノ
實用試驗
(明)三十
五年

- 二、自然通風ニアリテハ燃燒稍緩ナリ適度ノ通風ヲ用フルトキハ活潑ニ燃燒ス然リト雖モ英炭及天草煉炭ニ比スレバ遙ニ強通風ヲ要ス
- 三、灰燼ハ概シテ多シ
- 四、クリンカーノ質ハ粗鬆ニシテ粘着ノ傾向ナシ之本炭ニ付最稱揚スベキ長所ニシテ使用長時間ニ亘ルモクリンカーノ爲通風ヲ妨ゲラルルコトナク從テ終始罐ノ蒸發程度ヲ齊一ナラシムルヲ得

五、英炭天草煉炭ニ比シ發煙稍多シ而モ和炭ニ比シ遙ニ少シ

六、驅逐艦ニ在テハ煙突ヨリ飛散スル灰燼ハ英炭、天草煉炭ヨリ少シ

以上ノ成績ヲ綜合スルニ本炭ハ自然通風ニ在テハ我海軍採用ノ第二種炭ニ相伯仲シ強壓通風ノトキハ英炭ニ比シテハ素ヨリ及バザルモ第二種炭中ノ精選和炭(夕張又ハ豐國炭等)ハ勿論現時ノ天草煉炭ニ比スルモ其ノ實用的性狀ニ於テハ稍優ル所アリト認ム

然レドモ現時我國ニ於ケル煉炭ノ製造方法ハ未ダ以テ完全ニアラザルガ故ニ本煉炭ヲ製造スルニ當リ使用炭種ニ應ジタル製法ヲ講究シ得バ多少本炭ノ性能ヲ改良シ得ベシ

尙當時供試諸炭ノ性狀ヲ知ル爲メ左ニ分析試驗ノ結果ヲ示ス

明治三十五年二月石炭調査委員報告長門無煙炭製煉炭
試驗成績中供試諸炭ノ分析性狀比較

炭種		揮發物	固定炭素	灰分	水分	硫黃	
長門	榎ヶ谷	一五、五七	七四、一八	一〇、二五		〇、六七	越後ビツチ
長門	高島	一四、二三	七四、九七	一〇、八〇		〇、六三	舶來ビツチ
長門	榎ヶ谷	一九、三〇	六九、五八	一一、一二		〇、五二	ガスビツチ
長門	金田	一九、一〇	六九、九七	一〇、九三		〇、五五	ガスビツチ
天草	需品庫貯藏品	一三、九六	八〇、四六	三、六九	一、九八	一、一〇	
天草	中ノ鼻	一三、七五	七七、八四	四、〇一	二、四〇	一、二九	
天草	高島	一二、二二	八三、二八	三、三四	一、一六	〇、八五	
英炭	十一種平均	四二、一八	五〇、五五	四、九八	二、二九	〇、二九	
和炭	夕張	三九、三一	五一、九三	五、九一	二、八六	〇、九八	
和炭	十二種ノ平均						

右報告ニ基キ有馬海軍艦政本部長ハ明治三十五年三月艦本第四二二號ノ二ヲ以テ櫛ヶ谷無煙炭ヲ原料トセル煉炭ハ海軍第二種炭ニ適スル旨ヲ會社ニ通知シ更ニ松本艦政本部長ハ特ニ海軍ニ於ケル將來ノ需用見込ニ關シ示ス處アリシカバ會社側ハ左ノ通請書ヲ提出シ自ラ進ンデ海軍煉炭ノ製造ヲ起サントスルニ至レリ

御 請 書

艦本二第二〇六號

長門櫛ヶ谷無煙炭製煉炭ハ海軍用第二種炭即チ艦艇平時ノ供用炭トシテ使用シ得ベキモノト認定相成候ニ付テハ其ノ價格製造地海岸渡ニテ一噸ニ付九圓乃至九圓二十錢ノ範圍ナレバ一ケ年約十萬噸ノ需用可有之見込ニ候條右様御了知相成度豫メ此段及通牒候也

明治三十五年三月二十日

松本海軍艦政本部長

長門無煙炭礦株式會社社長 男爵 澁澤榮一殿

長門無煙炭礦株式會社海軍煉炭製造ヲ企テシモ實現ニ至ラズ
(明治三十五年)

右御達ニ基キ重役會ノ決議ヲ以テ早速山陽鐵道株式會社へ運炭方法ヲ交渉仕傍ラ目下武田中監海外ニテ御研究ノ新式製煉炭機械ヲ以テ輕便ニ製造仕等精々御達ノ御主意ヲ尊奉御用便仕度精神ニ御座候此段不取敢御請候也

明治三十五年四月七日

長門無煙炭礦株式會社

取締役會長 男爵 澁澤榮一

松本海軍艦政本部長殿

海軍當局ハ軍用燃料ノ供給確立ノ見地ヨリ右會社ノ企畫ニ關シ直接間接ニ支持誘導スル處アリシガ本企業上必要ナル山陽鐵道本線ヨリ坑所へノ支線布設ニ關シ其後山陽鐵道株式會社トノ交渉意ノ如ク進捗セズシテ時日ヲ經過スルニ至レリ

之等民間企業ノ狀況ト時局ノ推移トニ鑑ミ當局ハ再ビ豫テノ懸案タリシ海軍直營事業創始ノ儀ヲ考慮スルニ至リ先ヅ更ニ充分ノ實驗ヲ遂グルコトナリ明治三十六年九月海總第四〇一二號艦本第一九〇四號ヲ以テ佐世保鎮守府ヲシテ長門炭(桃ノ木及櫛ヶ谷炭)三百噸ヲ購入シテ之ヲ主原料トシ新原、旭、豐國、高島ノ諸炭ヲ配合セル煉炭ノ製造ヲ日本煉炭會社ニ委託セシメ

海軍自ラ煉炭製造ヲ企ツ
(明治三十六年)

海軍長門炭田調査
(明治三十六年)

ラレタリ(此ノ試製ハ其ノ後時局ノ影響ニ依リ意外ニ遅レ翌三十七年九月ニ至リ漸ク陸上試焚
ヲ了セリ)

二二二

又同年十月海軍技師石橋政信ヲシテ更ニ長門炭田ノ實査ヲ行ハシメ同炭田ノ採掘可能炭層タル
猪ノ木層、上層、下層、藤ヶ河内層、麥川層ノ内炭質優良ナル上層、下層ヲ採掘稼行スルモノ
トシテ採炭計畫ヲ立テ其ノ設備費豫算約貳拾萬五百圓ヲ以テ年額四萬噸ヲ出炭シ得ベク爾後年
次相當ノ施設ヲ加フレバ四ヶ年後ニハ毎年拾萬噸以上ノ採炭ヲナシ得ベキ旨ノ報告ヲ得タリ
其後時局益々重大ニシテ別ニ記スガ如ク愈々海軍煉炭製造所設立ノ議内定セララルヤ村上海軍
省經理局長ハ長門無煙炭礦株式會社取締役淺野總一郎ニ炭田獻納ノ儀ヲ勸メタルモ淺野ハ多數
株主ノ到底之ニ應ゼザルベキヲ述ベ少クモ拂込程度ヲ以テ買上ヲ希望シ交渉ノ結果金貳拾萬圓
ヲ以テ同社ニ屬スル無煙炭礦區全部及一切ノ設備ヲ買收スルコトニ明治三十七年三月二十四日
官房機密第六三四號決裁ヲ經テ假契約ヲナシ次デ四月一日附ヲ以テ本契約ヲ締結シ同六日一切
ノ授受ヲ了セリ

海軍長門炭
礦ヲ買收ス
(明治三十七年四月)

尙ホ右會社礦區ノ間ニ介在セシ別ノ二礦區(四二五、四一七坪代價約金壹萬八千圓)ヲモ買收
シ明治三十七年四月十二日農商務省告示第九一號ヲ以テ左ノ通海軍所屬礦區ヲ公布セラレタリ

登録第一號	海軍鑛區	五九八、六三一坪	試掘地
同 第二號	同	二六三、一七八	同
同 第三號	同	五五〇、〇一六	同
同 第四號	同	四四三、六五二	同
同 第五號	同	一五、〇七四	同
同 第六號	同	五九六、四四七	同
同 第七號	同	二、九五八、〇九九	採掘地 (荒川、楯ヶ谷、桃ノ木、草井川)
同 第八號	同	五五〇、一二三	試掘地
同 第九號	同	五五八、三六六	同
合計	六、五三三、五八六坪		

斯クテ煉炭製造所設立委員ハ同年六月海軍大臣ノ認許ヲ得テ工學士石田收等ヲ聘シ炭坑開坑ノ
設計等ヲ囑託シ請負人内田某ヲシテ先ヅ桃ノ木、楯ヶ谷二坑ノ開鑿ニ從事セシメ其進行ニ伴ヒ
明治三十八年一月認許ヲ得テ明治三十七年度内ニ煉炭原料約七千噸ヲ出炭シ以テ煉炭製造事業
開始時ノ原料ヲ準備スルノ方針ヲ以テ進ミシガ中途斷層等ノ支障ニ遭ヒ遂ニ同年度ニハ出炭ノ

桃ノ木楯ヶ
谷二坑開鑿
着手
(明治三十
七年六月)

二二三

機運ニ至ラザリキ

臨時海軍煉炭製造所探炭部ヲ大嶺ニ置ク

(明治三十一年四月)

長門炭出炭(明治三十八年度)

翌明治三十八年四月臨時海軍煉炭製造所條例制定其探炭部ヲ大嶺ニ置キ本炭坑ノ探掘ヲ掌ラシメラル
同月官房機密第四五六號ヲ以テ明治三十八年度内長門炭山ヨリ約三萬三千噸ト及前年度出炭ヲ豫定セシ七千噸ト共ニ四萬噸ヲ出炭シ煉炭製造ノ件ヲ決裁セラレ探掘ヲ行ヒシガ更ニ餘力ヲ以テ同年内約一萬噸ヲ準備用トシテ出炭スルニ至レリ
其後曩ニ民有時代ニ一部着手セラレアリシ荒川坑區域ニ對シ調査ノ結果有望ナルヲ認メタルヲ以テ上申認許ヲ得テ之ヲ開坑シ四十一年度以降桃ノ木、楡ヶ谷、荒川ノ三坑ヨリ出炭スルコトトナレリ

長門炭出炭制限(明治三十九年)

元來本炭坑ハ海軍製煉炭ノ基礎原料トシテ逐年額出炭十一萬噸乃至十五萬噸ニ達セシムベキ
目途ヲ以テ開發ヲ進メ來リ既ニ四十年度ニハ之ヲ以テ第一種煉炭六千余噸ヲ製造シ四十一年度ニハ出炭額モ十萬噸ヲ超ユルニ至リシガ探掘ノ進行ニ伴ヒ炭質最初ノ如ク良好ナラズ又平壤購入使用ノ關係上明治四十二年以後ノ出炭ハ約六、七萬噸ニ制限セリ而シテ當事者ハ選炭、洗炭ノ方法等ヲ工夫シ相當改善ヲ見タルモ尙ホ第一種炭原料トシテハ品質充分ナラズ一方平壤炭ハ

○海軍探炭所ニ屬シ探炭所支所ヲ置カ

(明治四十五年)

○荒川坑ヲ廢ス(大正二年)

○炭坑經營方針決裁(大正三年一月)

其後實驗ヲ重ネ愈々第一種炭原料ニ適スルコトヲ認メラレタル結果明治四十四年一月海煉機密第三號海軍煉炭製造所長ノ上申ニ基キ四十四年度以降長門炭ノ探掘量ヲ毎年度約五萬噸ニ止ムルコトニ方針ヲ決セラレタリ

明治四十五年三月勅令第六十三號ヲ以テ本大嶺炭坑ヲ海軍探炭所ニ屬セシメラル

大正二年荒川坑ハ坑道楡ヶ谷坑ト連絡スルニ至リ之ヲ廢止セラル

大正三年一月官房第二二二號決裁ヲ經テ本炭鑛ノ經營ニ關シ左ノ方針ヲ執ラル

一、桃ノ木、楡ヶ谷ノ兩坑所ヨリ探炭ヲ繼續シ得ル限り現行ノ量(大正二年度四萬三千五百噸)ヲ標準トシテ適當ノ改修ヲ行ヒツツ探炭スルコト

二、右坑所ノ探炭不可能トナリ更ニ新坑所ノ開掘ヲ要スル場合ニハ豫メ見込ヲ立テ前々年度ニ

於テ大嶺炭鑛ノ運命ヲ確定スルコト

翌大正四年二月左ノ通本炭鑛廢坑ノ方針ヲ決セラル

官房機密第二四〇號 大正四、二、二三 決裁

大正三年一月二十七日官房第二二二號ヲ以テ大嶺炭山探掘方針ニ關シ御決裁ノ上桃ノ木、楡ヶ谷兩坑ヨリ探掘中ナルモ楡ヶ谷坑ノ命數ハ一兩年ニ限ラレ桃ノ木坑ハ出炭漸次困難トナル

○炭坑廢止ノ方針ヲ決ス

○平壤炭トノ關係
(大正四年
二月)

ヲ以テ此際必要ノ場所ノミ掘進シ他ハ全部柱引シ大正四年度ヨリ向フ三ケ年ヲ期シ廢坑可然哉
理由

二一六

○樫ヶ谷坑ヲ廢ス
(大正五年
十二月)

今回採掘請負者ヨリ單價ヲ値上スルカ若クハ採掘期ヲ向フ二三ケ年ニ限ラレ度旨願出アリ然ルニ大嶺炭ハ品質不良ニシテ他ニ之ニ代ルベキモノアラバ値上シテマデモ採掘セシムル要ナシ一面ニ於テ平壤炭鑛ハ早晚擴張ヲ要スル事情アリ今ヨリ總督府ト協議セバ大正七年度ヨリ原料所要額ヲ採掘シ得ルヲ以テ大嶺ハ大正六年度ヲ期シ廢坑スルヲ得策ト認ム

○更ニ再調査ノ上探掘繼續ニ決ス
(大正七年
一月)

斯クテ此方針ノ下ニ稼行ヲ繼絶シ樫ヶ谷坑ハ大正五年十二月採炭終了ト共ニ之ヲ廢シ桃ノ木上層坑ノミヨリ採炭セシガ其後歐州戰亂ニ伴ヒ一般炭價異常ノ騰貴ヲ來シ且ツ大嶺炭山ノ如キモ其ノ拂下ヲ希望スルモノヲ生ジタル等ノ事情ヲ動機トシテ大正六年末之ガ處置ニ關シ再調査ノ結果一般炭價ノ騰貴斯ノ如キ當時ノ狀況下ニ在リテハ寧ロ引續キ之ヲ煉炭原料ニ利用スルノ有利ナルベシトノ結論ニ到達セルタメ大正七年一月十八日官房機密第八一號ヲ以テ相當計畫ヲ以テ此際採掘ヲ繼續スルノ件ヲ決裁セラレ當分年額出炭約四萬噸ヲ目途トシテ採掘スルコトナレリ是ニ於テ採炭所長ハ同年七月新ニ草井川坑ヲ設ケ直營ヲ以テ大正八年一月ヨリ上層炭ノ採

○草井川坑開坑
(大正七年
七月)

○桃ノ木坑ヲ廢ス
(大正八年
一月)

掘ヲ開始セリ又從來ノ桃ノ木上層坑ハ大正八年一月採炭ヲ了シテ廢坑トシ同時ニ桃ノ木下層ノ未採掘區域ヲ直營ニテ經營スルコトトセリ其後一般炭界沈靜ニ歸スルニ及ビ大正十一年九月愈々全鑛ノ廢坑ヲ決セラルルニ至レリ當時ノ事情ハ左記決裁ノ如シ

大嶺炭鑛經營廢止ノ件

(大正一一、九、一八 官房機密第一三二一號決裁)

大嶺炭鑛ハ明治三十八年開始以來採掘ノ進行ニ伴ヒ炭質漸次不良トナリ第二種煉炭ノ製造ニモ幾多ノ困難ヲ感ズルニ至リシガタメ大正四年官房機密第二四〇號決裁ニ依リ大正六年度ヲ限リトシ廢坑トスルノ方針ヲ定メラレタル處其ノ後大戰ノ影響ヲ受ケ大嶺炭ノ經濟的價值ハ幾分其ノ面目ヲ改ムルニ至リ更ニ研究ノ結果大正七年官房機密第八一號決裁ニ依リ引續キ採掘ヲ行フコトナリ今日ニ及ベリ蓋シ當時一般炭價ハ異常ノ暴騰ヲ來シ此ノ狀況ノ下ニ在リテハ煉炭製造上多少ノ不便ヲ忍ブモ大嶺炭ヲ使用スルヲ以テ經濟上有利ノ計算ヲ得タルコト竝ニ將來軍備ノ擴張ニ伴フ莫大ナル煉炭ノ需要ニ對シ之ガ資源ノ狀況ヲ顧ルトキハ未ダ遮カニ本炭田ヲ廢スルノ時機ニアラズト認メラレタルニ依ル

○大嶺炭鑛愈廢坑ノ件決裁
(大正一一
年九月)

二一七

然ルニ戦後一般炭況沈靜ニ復スルト共ニ大嶺炭ノ經濟的價値ハ再ビ低下セラレタルノミナラズ其ノ品質ハ益々不良トナリ爲ニ現在ニ於テハ第一種煉炭原料トシテハ全ク使用シ難ク第二種煉炭用トシテ僅カニ一割内外ノ配合ヲナス場合ニ於テモ尙ホ煉炭ノ品質ヲ低下スルノミナラズ之アルガ爲ニ他ノ配合炭ノ選擇ヲ困難ナラシメ煉炭製造上尠カラザル不利ヲ實驗シツツアル次第ナリ

今ヤ軍備協定ノ結果煉炭ノ戰時所要額ハ當然減少シ且ツ平壤鑛業部及附屬炭田ノ移管ニ依リ煉炭資源ノ關係モ當時ニ比シ著シク緩和セラレタル今日ニ於テハ最早海軍ガ如上ノ不利ヲ忍ビ本炭鑛ヲ經營スベキ理由ナシト認メラルルニ就テハ此際左記ノ通處分ノコトニ方針ヲ定メラレ可然哉
右仰高裁

記

- 一、大正十一年度末ヲ以テ大嶺炭坑ノ經營ヲ廢スルコト
 - 二、大嶺炭坑ノ財産中他ノ燃料廠各部ニ流用ヲ必要トスルモノハ之ヲ移轉使用ス
- 但シ將來部外官民ニ於テ之ヲ經營スル場合直接必要ノ諸設備ハ其儘トシ之ヲ移轉セズ

三、前項ニ依リ各部ニ流用スル以外ノ財産ハ經營廢止ト共ニ全部大藏省ニ移管ス
海軍省當局ハ右ノ決裁ニ基キ爾後本件實施ニ關シ大藏省當局其他トモ打テ合セ翌大正十二年一月左記覺書ノ要領ヲ以テ細目ノ交渉ヲ進メ同月三十一日左ノ通吳鎮守府司令長官ニ訓令セララルニ至レリ

大正一二、一、一三 起案

(主務 軍需局)

大嶺炭鑛引繼ニ關スル覺

大嶺炭鑛ハ其品質海軍ノ需用ニ適セザルモ部外ノ特種用途ニ對シテハ同炭田關係者多年ノ努力ニ依リ逐次需用ヲ開拓セラレアリテ今回海軍ノ經營廢止ト共ニ本事業ノ基礎ヲ荒廢ニ歸セシムルハ國家經濟上甚ダ不利ナルノミナラズ多年海軍炭鑛ノタメニ存在シ來レル同地方及多數従業員ノタメニモ此際適當ナル經營者ヲシテ本事業ヲ繼續セシムルノ要アリ海軍ガ本炭鑛ノ經營ヲ廢スルニ當リ特ニ事業上必要ナル諸設備ヲ其儘殘存セントスルハ全ク此故ニ外ナラズ

乃チ此際以上ノ主旨ヲ大藏省ニ申入レ尙經營廢止前後ノ處理ニ關シ凡左記要領ニ依リ大藏當

○大嶺炭鑛
引繼ニ關
スル要領
(大正十二
年一月)

記

- 一、海軍ノ經營廢止ヲ大正十二年三月末日トシ同日迄ニ目錄（略）ノ設備一切殘存材料若干ヲ當時ノ現狀ノ儘海軍省ヨリ大藏省ニ引繼グモノトス
但シ引繼ノ當事者ヲ海軍燃料廠長、及大藏省側ハ所轄稅務監督局長トス
大藏省ハ其以前成ベク早ク事業繼承者ヲ決定シ海軍ノ經營廢止ト共ニ右繼承者ニ於テ事業ヲ繼續セシムル様處置スルコト
事業繼承者ハ大藏省之ヲ決定サルベキニ付從來海軍ニ於テ受付ケタル拂下願書（内田久大嶺無煙炭坑株式會社、朝鮮無煙炭鑛株式會社願出ノ分）ハ豫メ之ヲ同省ニ移牒ス但シ海軍炭坑及右請願人ノ事業ノ情況等ニ關シテハ適宜海軍ヨリ大藏省ニ説明シ本件處理上ノ參考ニ供ス
- 二、海軍炭坑廢止マデニ事業繼承者ヲ決定シ難キ場合ハ大藏省ハ海軍省ヨリ引繼ヲ受ケタル後成ベク速ニ右繼承者ヲ定ムルコトトシ其ノ決定マデノ間、同省ニ於テ坑内ヲ維持スルモノトス

或ハ大藏省ト協議ノ上同省ノ經費ヲ以テ海軍ニテ此作業ヲ請負モ可ナリ

備考 本作業ニ要スル經費ハ月額約五千六百圓ニシテ囑託一、雇員三、鑛夫約四〇ヲ

要スル見込ナリ

- 三、海軍ハ三月末日迄ニ從業員全部ヲ解傭ス、大藏省（又ハ事業繼承者）ハ右解傭者ノ希望ニ依リ四月末日迄其儘納屋ノ使用ヲ認ムルコト
- 四、海軍ハ經營廢止ノ際ニ於ケル從業員ノ始末ヲ簡單ナラシムルタメ要スレバ經營廢止ノ相當以前（例ヘバ三月初旬）ニ實際ノ事業ヲ大體終了シ從業員ノ大部分ヲ整理シ爾後三月末日迄ハ主トシテ坑内維持ノ作業ヲ繼續スルノ手段ヲ執ルコトアルベシ
- 五、第一項ニ依リ引繼グベキ殘存材料トハ鑛場用燃料坑營需品其他ニシテ其數額等ニ關シテハ追テ大藏省ト協議ス
右以外ノ生産炭ハ全部海軍ニテ整理ヲ終了シ大藏省ニハ引繼ガザルモノトス
- 六、鑛業權ノ移轉ニ關スル手續ハ第一項ノ引繼完了ノ日ヲ以テ大藏省ニ於テ取計フコト
- 七、尙ホ現場引繼ニ關スル詳細ノ事項ハ海軍燃料廠長、所轄稅務監督局長ト協議ス

大正一二、一、三一 官房機密第一二五號
加藤海軍大臣ヨリ鈴木吳鎮守府司令長官ニ訓令

大嶺炭鑛廢止及引繼ニ關スル件

○大嶺炭鑛
廢止引繼
訓令
(大正十二
年一月)

海軍燃料廠大嶺炭鑛ハ本年三月三十一日限り之ヲ廢止シ同炭鑛ノ財產ハ左記要領ニ依リ大藏省
ニ引繼ギ其旨報告スベシ
右訓令ス

左 記

- 一、鑛區竝ニ鑛區ニ存在スル財產中他ノ燃料廠各部ニ流用ヲ要スルモノハ之ヲ移轉使用ス但
シ將來部外官民ニ於テ之ヲ經營スル場合事業ニ直接必要ノ諸設備ハ其儘存置スルモノト
ス
 - 二、前項ニ依リ移轉使用スル以外ノ財產ハ全部大藏省ニ引繼グモノトス
 - 三、右引繼ノ當事者ヲ海軍燃料廠長及所轄稅務監督局長トス
- 尙流用物品等ニ關シテハ前記覺書ト共ニ海軍省軍需局長、同經理局長ヨリ吳鎮守府參謀長ニ申
進メラレタリ

廢止引繼狀
況

(大正一二、二、二、軍需機密第二號ノ一五)

是ニ於テ海軍燃料廠ハ二月上旬ヨリ廣島稅務監督局ト引繼準備ニ着手シ三月下旬ニハ現地ノ作
業ヲ停止シ大部ノ鑛夫ヲ解僱シ(特別賜金ヲ給ス)部員二名(西川機關中佐、倉富主計大尉)
ノ外雇傭員鑛夫數十名ヲ殘シ殘務所理及坑内維持ニ任ゼシメタリ

之ヨリ先海軍ガ大嶺炭鑛廢止ヲ決スルヤ地方民ハ拂下請願運動ヲ起シ其間例ニ依リ代議士等ノ
奔走陳情モアリ又時節柄鑛夫等ノ動搖防止ニモ留意ヲ要スルモノアリ海軍側ハ右作業停止ト共
ニ現地ニ於テ特ニ地方官民數十名ヲ招キ同炭鑛職員鑛夫等ヲ含ム離散會ヲ開催セシガ能ク意志
モ疎通シ圓滿裡ニ處置スルヲ得タリ

四月一日豫定ノ通大藏省ニ引繼ヲ了シ同時ニ技手一名鑛夫四十名ハ大藏省ノ所屬ニ轉ジテ坑内
ノ維持ニ當リ又前兩部員ハ吳鎮守府附トシテ引繼本件殘務整理ノ旁ヲ好意的ニ大藏省ノ右坑内
維持ノ事業ヲ監督セシメラルルコトナレリ

斯テ大正十二年三月海軍省令第四號同四月達第七十九號ヲ以テ海軍炭鑛中大嶺ヲ削除セラレ茲
ニ本炭鑛ハ明治三十七年海軍ニ買收以來十九年ニシテ海軍トノ關係ヲ終了セリ

此間毎年採炭額等概ネ別紙ノ如シ

(註) 本引繼ニ際シ土地面積ニ關シ海軍側、稅務署、登記所、三者各其臺帳ニ可ナリノ不一致ヲ發見シ四月一日以後ニ於テ之レガ調査、交渉ニ煩ハサレシガ結局大藏省側善意ノ了解ニ基キ解決セリ(大正一二、五月 燃廠機密第二七號ノ八參照)

尙ホ本炭鑛ノ拂下ニ就テハ初メ海軍當局ハ炭坑事業ノ特質勞働者失業問題等ヲ考慮シ信用アルモノニ隨意契約又ハ指名競争ニテ拂下ゲ以テ圓滿ニ事業ヲ繼承セシムルコトヲ希望セシガ大藏省側ハ四月二十日一般入札ニ依リ六〇一、一〇〇圓ヲ以テ東京澁谷權之助ニ落札セリ然ルニ其後澁谷ハ之ヲ實行セザルタメ破約トシ六月一日再入札更ニ同月下旬第三回ノ入札ヲ經テ六月二十六日漸ク拂受人某ニ引渡スヲ得西川機關中佐等モ現地ヲ引揚グルニ至レリ

大嶺炭 採炭高

年度	採炭高	採掘先	年度	採炭高	採掘先
昭和六	五一、〇〇〇	桃ノ木、楡ヶ谷	四	一〇四、八九八	桃ノ木、楡ヶ谷、荒川
元	七一、〇〇〇	同右	三	七〇、〇〇〇	同右
四	六七、七〇〇	同右	二	六一、二〇〇	同右

○大嶺炭採炭高

年度	採炭高	採掘先	年度	採炭高	採掘先
四	五三、七三八	桃ノ木、楡ヶ谷、荒川	六	七〇、五〇〇	桃ノ木
三	四七、〇二六	同右	七	四〇、六六一	桃ノ木、草井川
二	五三、四一〇	桃ノ木、楡ヶ谷	八	一五、四四五	桃ノ木下層、草井川
一	五八、五三五	同右	九	三五、七一五	同右
四	五七、四九〇	同右	一〇	四二、一六八	同右
五	五七、四九九	同右	一一	六七、一八四	同右